

## 幽世《カクリヨ》

能舞台の上に自ずと顕れ出でたる《カクリヨ》のモノが物語る世界。

それは幽世かくりよと現世うつしよの随まに行き来するための魔法の装置……。

《おんな》という存在は古来幽世から未来を見つめ、現世うつに出ることなく奥に居たもの。現に、表に咲く大輪の男花あらば、野に咲く見知らぬ女花あり。しからば、奥の、底の、野の、果ての気遣ひをお見せ致します。

八朔の壬辰、水の力頗る勢いたつ特別な日の饗宴と相成ります。

特別出演に民俗学の見地から、「幽世《カクリヨ》」の名付け親でもあり、《カクリヨ》を識る井戸理恵子。映像・音楽を操り《カクリヨ》の世界に誘う岩井美佳。そして舞囃子には、九州から久貫弘能と大阪から石黒実都が垣根と時空を越えて、金沢の「幽世《カクリヨ》」に集います。

## 舞囃子

### 高砂

松田若子

大鼓 飯嶋六之佐

太鼓 大橋紀美

石黒実都

小鼓 多田順子

笛 江野 泉

地謡

久貫弘能

福岡聡子

### 松風

久貫弘能

大鼓 飯嶋六之佐

笛 江野 泉

地謡

石黒実都

小鼓 多田順子

松田若子

福岡聡子

### 卷絹

石黒実都

大鼓 飯嶋六之佐

笛 矢郷由香子

地謡

松田若子

小鼓 多田順子

太鼓 大橋紀美

久貫弘能

福岡聡子

## 饗演

### 幽世

折口信夫「死者の書」より

朗読

井戸理恵子

謡

松田 若子

笛

江野 泉

映像音楽

岩井 美佳

死者の書 文：井戸理恵子

折口信夫は自著「死者の書」の中で「幽界」をかくりよ、と充てた。

「幽」という漢字の元は纏った糸の束が火で炙られ、黒くなったようなもの。それで、かすかな、ほの暗いという情景を意味するようになったもの、とか。

しかし、象形だけみていると、二つの糸車が人と人をたぐり寄せる縁で、山々に漂う魂のようにも思える。

古来、日本人の想像する「幽界」とはまさにそうした世界ではなかったのだろうか。すべての人の邂逅は魂の縁にある、のだと。そして、それらを結ぶのは「幽界」というつかみ所のない世界の仕組み、かもしれない、と\_\_\_\_\_。

大津が祀られている二上山はまさにそうした山。

謀反の罪を着せられ「死ぬに死ねない」彼の魂はここに遺るしかなかった、のだ。巫かんなぎとしての藤原郎女の存在はその魂の所在を強固にする。

彼女の魂がこの「幽界」に感応してしまったことにこの物語は終結する、ことになるのだから……。